

仙台ターミナルケアを考える会 25 周年記念祝賀会 祝辞

本日は、「仙台ターミナルケアを考える会 25 周年記念祝賀会」にお招きいただき、お祝いの言葉を申し上げる機会を与えていただきましたこと、大変光栄に存じます。またこの会のご尽力により緩和ケア病棟を併設し、多大な恩恵を受けております宮城県立がんセンターを代表して一言ご挨拶申し上げます。

この「仙台ターミナルケアを考える会」の歴史をネットでみてみますと、昭和 63 年に「ターミナルケア研究会」と称して準備会を発足、翌年平成元年 1 月、場所も今日と同じくここガーデンパレスホテルに 51 名の参加者と共に正式に「仙台ターミナルケアを考える会」が発足しました。

この時会の今後の方針として、セミナーの実施、シンポジウムの開催、ホスピス設置への陳情と請願など様々な項目の活動方針が承認されました。その後現在に至るまでその方針に沿って毎年活発に活動されていて、講演やシンポジウムなどその内容には目を見張るものがあります。

平成 6 年には宮城県立がんセンターへの緩和ケア病棟設置の陳情書を当時の宮城県知事へ提出、秋には設置請願の署名運動を展開し 51273 名の署名を集めていただき、12 月にこの請願は採択されました。このようにこの会が行政に働きかけたことにより平成 14 年に宮城県立がんセンターに緩和ケア病棟が併設されました。当時は日下先生、佐藤智先生、田島先生ら麻酔緩和医療科の先生方が大変なご苦勞のもと順調に緩和ケア病棟の運用が開始されました。その後緩和ケア病棟の運用の基礎が築かれ、平成 14 年の開棟から平成 26 年 3 月までの 12 年間に 1778 名の方が緩和ケア病棟に入院されました。1 年間に約 150 名の方が新規入院となります。現在では小笠原先生を部長として 2 名の医師と 23 名の看護師により 25 床の病棟が順調に運営されています。

さて、がんの医療は医学の進歩とともにその生存率の向上がみられ、5 年生存率でみますと 50%以上の方が治癒しております。しかし残念ながら治癒せず不幸にして亡くられる方がいます。かつて私が研修医であった昭和 50 年ころは今のような緩和医療の概念はなく、痛みと苦しみのなかでお亡くなりになる方が数多く見受けられました。ある地方の病院で、患者さんが肺転移で呼吸が苦しく、私の白衣を瘦せた手で握りしめて放さずに苦しいと訴え続け、酸素の投

与以外になすすべなく亡くなられた患者さんのことを、今でも忘れることはできません。そういった点で、現在の緩和医療は医療用麻薬の開発とその使用方法が格段に進歩し、終末期に苦しむ姿を見ることはほとんどなくなりました。最後まで人間として尊厳を持って生きることの大切さが、今ほど認識された時代はないと思います。

これも「仙台ターミナルケアを考える会」の理念である、がんによって終末期を迎えた患者とご家族の皆様の問題を中心として、生と死の臨床的な意味について学び、考えるということが普及した証しであると考えます。このことが結果としてがんの患者さんのQOLの向上に寄与しているものと思います。

徒然草で有名な兼好法師が「死というのは前からやって来るものではなく、こっそりと後ろから忍び寄る」と書いています。死を目前にして死を考えるのではなく、我々も死とはどういうものか、生きるとはどういう事かを常日頃から考えることが大切であると思います。今後はいかにして生き、またどこでどのように終末期を迎えるか、皆で考えていかねばならないと思います。

終わりに今日ここにお集まりになられた皆様方のご健康を祈念いたしますとともに「仙台ターミナルケアを考える会」の益々のご発展を期待いたしまして祝辞といたします。

本日は 25 周年、誠におめでとうございます。

平成 26 年 5 月 17 日
宮城県立がんセンター
総長 西條 茂